

6月の学習会の案内

平成26年6月18日

6月に入り、蒸し暑い日が続くようになってきました。先生方には、変わらずご活躍のことと存じます。

6月といえば、サッカーの世界カップです。残念ながら日本の調子は今のところ芳しくないようです。2戦目以降がどうなるか心配です。個人的な予想としては、次のギリシャ戦は2対1で勝ち、最終戦のコロンビアは2対2の引き分けというところですか。希望も含めて。ですが、これでは良くても得失点差でのグループリーグ敗退となるでしょう。やはり残り2戦とも勝つしかありませんね。状態と状況が悪い中どう打開を図っていくかに注目したいところです。

さて、状態が悪い話はこれくらいにして6月の語る会です。このところ説明文の授業構想を話し合う展開が続いていましたが、そろそろ実践につなげていきたいという話が聞こえてきています。ということで今後の実践につなげていくことができる教材として『鳥獣戯画』を読むを取り上げていきたいと考えています。まずは教材研究から授業化へとつながる話し合いを進めていければと思います。ぜひ、大勢の先生方のご参加をお待ちしています。

日 時	平成26年6月28日(土) 9:30~12:00
場 所	岡山大学教育学部附属小学校 <u>教師教育開発センター東山ランチ2F 授業研究室</u> ※部屋の名前が変わりましたが、同じ場所です。 TEL(086)272-0511 FAX(086)271-3455
連絡先	小出 真規(こいで まさき) TEL 090-5704-7339 m-koide@okayama-u.ac.jp (学校パソコン)
内 容	「鳥獣戯画」を読む(第6学年 光村図書) 教材研究から授業化へ向けた話し合い

<お知らせ>

※「おもしろ見つけ」の本を、附属小でお取り扱いしております! 来られる前に冊数をご連絡ください。代金引換となります。(特価!) 多くの方に手にとっていただけるように、みなさん! 宣伝活動をがんばりましょう!

※ 駐車場について

駐車場は「教師教育開発センター 東山ランチ」です。「実践センター」という呼び方がかつてしていたところで、学校の南西にある建物です。よろしくお願ひします。わかりにくいようでしたら、当日朝、小出の携帯にご連絡いただければと思います。

※今年度の**年会費2,000円**を集めます。よろしくお願ひします。

(やめられたり休会される場合は一声かけてくださるとありがたいです。また、会員の先生方の異動情報をおもちでしたら、教えてくださると助かります。)

4月の語る会の報告（すいません1ヶ月遅れです。）

文責 小出

田中先生より

○明治図書 教育学国語教育について

ワークシートをテーマにした特集を執筆。ワークシートを個人の作業課題から学びあいのためのツール、媒介として考えてみませんかという趣旨で書いた。電子黒板とタブレットとの連携を図った授業とも共通すること。とはいうものの、ワークシートのほうが、国語の授業でいうと電子黒板とタブレットの連携よりいいのではないかと思っている。

ワークシートをグループで作る。B4を4，6分割して、個人は分割したものを使用する。そして、張り合わせ1枚にしたものをグループで共有する。

4人なら4人分が貼られて、残りが全員での作業スペースとなる。自分が作ったものも対象化して共通点、差異点を発見するようになれば。一般のワークシートは練習問題みたい。練習問題とワークシートは一緒ではない。作業することを通して認識が変容、揺さぶられるものでないといけない。個人での作業（書き込み）から学びあい、それぞれがしたものを見て生み出される認識というものをこれから考えていくワークシートになっていくことが望まれる。

まるごと読みもおもしろ見つけも固定化はだめ。どんどん変わってっていくべき。学習者、教材が変わり、そこにどんなアイデアをもってくるかは無限の可能性がある。

小川先生より

（4月から大学でお仕事をされているとのこと。）

学生との授業から思うことは、読むことの経験をほとんどしていないということ。反応してごらん。できない。今日の提案の「のはらうた」でおもしろみつけ。こんな授業なら、眠らずにすみそう。大学で、おとなり同士でワークシートを置きあって、ディスカッションして書き込みをしてみると、大学生が喜んです。講義をするという経験はあるが、自分が文章と向き合って読みを作るといことはしてきていない。そこに意味がある。

○生活作文について

教科書の内容が機能作文に変わっていったので、生活作文を本気でしている人は少なくなった。また、日記指導と生活作文も違いがある。

附属小学校時代の先輩は、5，6年生で生活作文を書かせていた。5，6年生は頭で分かるのでくわしく書こうとしない。5，6年で自分の生活をきちんと描写を入れながら書けるといことはすごいこと。3，4年生の生活作文をしているときに、あるとき子どもがおもしろくないよ、と言った。そのときしたのが、なりきり作文。あなたは教室の何になりますか。ゴミ箱、黒板、黒板消し、になってみる。黒板消しになって見てみることで、普通の生活作文とちがってくる。黒板消しになっている子とゴミ箱になっている子とでは切り口がちがう。一方の立場で書けないことを一方が書くということで気づいていく。そうすると、生活を切り取ると

いう目、見方、考え方が育っていく。今日の難波先生の実践と重なってくる部分。

○言語活動例について

どのように活用して単元の構想を組むのか。さまざまな議論があるが、一つの見方を提案している。3次に何をもって来るか。「のはらうた」の鑑賞、もしくは難波先生のように書くというところにもってくる。1次で書くという意識が浮かぶのか、2次で読み込んで2次の終わりに次のめあてがくるのか。どう言語活動を設定するかのか。難波先生は書くを1次、2次は書くための鑑賞。

言語活動に対して自分はどのスタンスをとるのか。1年生では、このような展開は、無理。めあてをどうもたせるのか。どのタイミングでもたせるのか。

くわしく書くから省略して書くの境目は10歳。伝えようとするものが把握されるとそれしか書かなくなる。どうやって伝わるように書こうかとは考えないので、極めて自分にしかわからにもの書きあがってしまう。それが4年くらいから出てくる。

総じて叙述量は3年までは増えてくる。書いても書かなくてもいいようなことまで書く。4年生くらいから、急降下。去年までたくさん書いていたのに。なんで減ったのというより、よく成長したということ。でもそれで受け手には伝わるのかということを考えていく段階。そうすると描写や説明の言葉が必要になってくる。

○なりきり作文

生活文の系列。1, 2年は私を通して書く。自分がとらえているものこそが文章になる。自分の視点から書くということができるとやがては抜けていく。その一つの過程になりきり作文。それが出てくるといったりきたりしながら高学年へといく。そういう点で、4年生くらいでなりきり作文をやる意味がある。

難波先生の実践発表

くわしくは、当日の資料をごらんください。

全体の場での質問

塩崎先生

質問1

「自分のもったイメージがどのように相手に伝わっているのか考えて書かれている実践が少ない」と書かれている点についてくわしく教えてほしい。理論的な側面と実践的な側面について。

質問2

3次の感想の交流について、3次1時は、友達と完成作品を読みあい感想を交流するところだが、45分がどのように進んでいったか。

難波先生

自クラスは、学級閉鎖になって、完全燃焼ができなかったところもあったが、3次はみんなの前で自分の作品を読む。それに対して他の子たちが一人の子どもに感想を返していく。もう一つのクラスでは、グループで自分の作品を見せながら、友達からもらった意見を書き込んだりしながら時間で切って進めていく。動きのある交流のスタイル。

最後のまとめは、みんなどうだったかというと、自分たちが、なりきりポイントを使って書く伝えたいことが伝わったし、友達の作品から何が伝えたいかがよくわかった。工藤直子さんから勉強したなりきりポイントで

詩を書くことがで、力がついたんだね。とまとめた。

小川先生より

すごい実践。1年間に1度単元構想をやってきちんと授業をすると子どもが1年分の学習が出来る。1年に1回でもこうしてきちんと単元を組んで授業をすると子どもがしっかりと力をつけることができる。なりきり作文、なりきりスケッチ、言葉集めカードなどのステップを踏みながら授業をされている。授業構成の工夫や子どもの作品の素晴らしさについて話ができそう。もう一つは、これは言語活動例ととてもつながっている。4年生の子どもが単元をつらぬく課題を本気で意識したのはいつごろかということは考えた。最初は種まきで頭の片隅。ところが、野原うたを読んでいくなかで広がって行って最後爆発状態。そのあたりの子どもの意識がどのように豊かになっていくのかを見ていくと、単元をつらぬく課題とか言語活動例について考えることができる。最後に学活の時間に交流している。今の学習指導要領では、いかに身に付けた技能や知識を活用していくか。そのあたりの設定も魅力があった。

小野先生より

学活の教室掲示はどのような流れで出来上がっていったか。

難波先生

2次でキャラを設定した時点で、学活を平行して行っていった。学活で楽しく自分のキャラを作ってみようということで同時に進めた。1次が終わったところから段々出来上がってきて2次で出来上がった作品の掲示につながっていった。

グループ協議後の発表

グループ1

○ワークシートについて

ワークシートの良さ、スモールステップで子どもの思考の流れにそっている。言葉集めカードで簡単な詩のようなものを作って、しかもそこに矢印を付けて子どもに試行錯誤させている。それがいい詩をつくることにつながっている

○単元をつらぬく課題

子どもの意識を大切にした構成。詩の魅力、書き方をわかって、さらにモデルを提示している。それが子どもにとって書きやすかったのではないか。

○モデルのよさ

モデルやキャラクターのイメージを作るときに、しるしをつけたりする部分があった。そこで気をつけたことをもう少しわしく聞きたい。どうイメージの言葉を選んでいくと詩につながっていくのか。ポイントについてもどのポイントを重視したのか

○3次について

よかった、楽しかっただけでなくきちんとポイントに落とされている。よさを見る目を子どもに落としていっているの、見る目が鮮明になっていっている。

○推敲について

理論の図の中の推敲があるが、子どもの活動の中では、どの部分が推敲になるのか。

難波先生

インスピレーションというか、お気に入りということに重点を置いた。真っ暗だったら、もっとイメージがふくらみそうだからこれを選んだんだよと伝え、みんなも、もっとイメージが膨らみそうなお気に入りのものがある？と問いかけると、子どもは言葉に印をつけるんですけど、実際に集めると鉛筆が止まる子もいて広がらなかったら、なりきりスケッチにもどって、もっと広がる違う言葉を選びなおすとずっと進むということもあった。なりきりスケッチと言葉集めカードを行き来しながら進めていった。

推敲は、子どもが一つ作った時点では満足しているので、直そうとはならない。今回はたくさん書く中で書き重ねるということを推敲ととらえた。また、言葉集めカードで試行錯誤することも推敲としてとらえた。

グループ2

○なりきり作文

なりきることで恥ずかしさがなくなる中で自分が出せていい。スモールステップでいい。ただ、踏みすぎという視点もあるかもしれない。なりきりスケッチもいいが、やりながらスケッチするという視点ももってもいい。なりきりスケッチで選択肢を広げることで、言葉が豊かに出てくる。イメージから言葉を集めていくので、シャープになって詩で使える言葉になっていく。なりきりスケッチはいっぱい書くという気がするが、子どもたちのスケッチを見ると、そんなにたくさん書いているわけではない。なりきりスケッチの言葉を言葉集めカードですぐに集めているので、スムーズに進めていくことが出来ている。

○見方を変えた詩づくり

小さい学校だったら、同じメンバーになりがち。見方を変えた詩を作ることで、様々な見方ができる。見方を変えるということは対比的な書き方とも言えるので、対比にしぼって書いてもいいかもしれない。友達のアドバイスを聞いて違うキャラで書くことでアドバイスを聞き入れてよりいいものを書くことができる。

○なりきりポイント

次に使える、振り返りができる、低位の子にとってもいい、評価基準にも使える。

○単元をつらぬくめあて

単元をつらぬくめあてを本気で意識したのはいつか。1次では、ぼんやり見えていた状態で、本気に意識したのは、毎時間の積み重ねで鮮明になっていったのではないかな。相手意識があって自己理解や他者理解にもつながって行って学級経営にも資するものになっている。

グループ3

○よかったところ

本当に子どもの意識の流れがスムーズでずつつながっている。その要因は、1時目のイメージつくりと書き方がつながるように「おもしろ見つけ」で入って、イメージはどの言葉から来ているかを確かめていったのがよかったのではないかな。また、作者の紹介があったところで、あなたは何になりますか？という作者の紹介の段階が大きなキーポイント。そこから子どもたちの書きたいという目的意識が出てきている。

書くということでは目的意識が出るのは、読んでから書くということでは、最初からそれを意識するのは無理で、どの段階で「ぼくたちも書きたい」となるのか、ということについて話をした。

○難しいと思った点

なりきりスケッチと言葉集めカードのところ。色々なことをスケッチで書いているが、その中から一つ集めカードに選んでいるが、それが一番いい方法なのかなという疑問が出た。中には、つなげて考えることができる言葉もある。いろんな言葉が出てきてつなげて、同じワークシートに重ねて書くこともできたのではないかという意見も出た。その時点で使ったなりきりポイントの自覚化も出来たかもしれない。

もぐらさんを書くのに、見本を二通りで書いているところがよかった。違う動物ではなく同じ生き物で書いたことで、違う見方で重ねて書くことができることにつながっている。

最後に、イメージがどのように相手に伝わっているか考えて書かれている実践は少ないという点については、3次での子どものワークシートで「自分が思っていたおおかみが本当に読んでコメントしてくれていることを読むことで、自分のイメージが伝わったかどうか、書いた子どもが振り返りをする事ができる。

難波先生

なりきりスケッチと言葉集めカードの行き来には、個人差があって、重ねて書くようなワークシートを検討することもできたかもしれない。やりながら、自由でいいんだなと思った。なりきりとスケッチとの行き来が少し不自由になった面もあったので、途中から自由に使っていいという路線変更も取り入れながら進めていった。

グループ4 (小川先生同席グループ)

イメージ作りの段階がすごい。流れが自然、いろんな仕掛けが仕組んであって、子どもの思いが膨らむことにつながっている。モデル作文もいいし、なりきりポイントも、イメージ作りのところもよかった。

キャラクタが窓口になって、キャラクタがとらえた世界がはっきりして、認識が深まってくる。そこに表現の工夫が生まれてくる。そう思っとなりきりポイントを見ると、段々左側にいくにつれて世界が広がっている。3次の学活で作られた「のはらうた」の世界にキャラクタと詩が位置づけられていって、自分がそこにいる、距離感のある他者が認められる、国語で人間が育っていくという話を小川先生に教えてもらった。

グループ5 (難波先生同席グループ)

スモールステップが分かりやすかった。言葉集めは、自分なら省くという意見もあった。子どもの実態に合わせて使わないといけない。言葉集めカードで子どものイメージが見えるので、言語能力という面もあるが、子どもが考えていることが担任として見えるという面もある。一つの人物になりきって、別の詩を書くということについては、人間がいろんな面をもっているという人間認識にもつながっている。

3次を学活でしたということには、望ましい人間関係づくりに貢献している、みんなで作り上げたところがよかった。野原うたを書くということだけでなくポイントを抽出して書けば書けるということが見えてきた。

単元をつらぬくめあてについては、1次をイメージ作りと書き方の指導に分けて指導を進めた。読むために書くということはよくするが、書くために読むという実践だったので、大変ありがたい。自分がはまった詩教材を子どもも好きになってくれたということを実感した。

小川先生より

どうやって態度を身につけるかということ。附属にいたころは、能力態度を身につけることを大切にしていた。今考えると学び合いも大切に感じている。学習指導要領では、学びあうということが指導内容になってい

る。生きる力を考えると、個人個人にどんな力がついたかも大切だが、学び合いということも大切になってきている。本県では、学力調査の結果が芳しくないが、学習意欲が弱い。学習と正対するということができない子どもがどんどん増えてきている。そういう子どもが来るんだと思って学校は動かないといけない。学びあうということは学習意欲とからむ。

3次と関係するが、活用型の授業が求められる。国語は言葉の力をつける。この授業では、視点をもってまわりを見る、視点をもってとらえるということ。この力をつけていけば、社会や理科で感性を使ってとらえたり分析したりする力につながる。視点をもってとらえる、言語でとらえるという力を国語できちんと培っておけば、他教科へも広がっている。国語と理科と社会のクロスカリキュラムが仕上がっている。最後に道徳をもってくるということも考えられる。どんな価値をもってこられるかは考えないといけない。大単元の中で子どもをどう育てるかということ。

自分の作品を人にさらすということ。そして、評価してもらおうという経験が大切。耳が痛いこと言われたりや誉めてもらったりする経験を積み重ねておくと、じぶんをさらけ出すことが平気になっていく。そしたら、強い。どこへいっても何か言える子どもになっていく。一つのプロジェクトを成功させていく人間に育っていくのではないか。

細かい表現過程を重ねているが、細かい表現過程を組めば、いい授業ができるわけではない。できることもある。表現過程を組んだばかりに子どもがおもしろくなくなることもある。細かい表現過程と子どものいい作品というのは直接結び付けすぎないということは心に留めていく必要がある。

宮本先生（岡山大学教職大学院）より

学習意欲については、岡山県はびっくり。なぜかと考えるとおもしろ見つけをおもしろくなくさそうにやっている、先生がおもしろくないといけない。先生がこれ楽しいなと思えないといけない。難波先生の授業はそれが前面に出せていた。私はこれが楽しかったからみんなもこれを体験してということが出ていた。

見方を伝えていく授業であった。ある立場に身をおくことによってどういう見え方がするのかを表現していく授業であった。4年生ではぜひともやってもらいたい授業。分析的に語るということもできている。一方で切り取られた世界は、あくまでもその子の世界。他の子からどう見られるのかを切り取っていくことも大切。子どもがかまりきりゆうじさんの詩をばったなんとかさんになって見てみたら、どんな返答を返すでしょうか、ということも応答性としてある。「いつも悪い人と思っていたけど、そんなことも思っていたのね。ぼくはくわれて・・・」違う世界が交流されて広がっていく。クラスの共感も生まれてくる。第3次はそういった活動もやってもらいたかった。自分のもったイメージが相手に伝わるという手立てにもなる。交流ということを考えていくことが大切だが、何を交流するかというと視点を交流するということをしていけば、もっといい授業になっていった。

詩というジャンルだからこそ、起こる表現性ということもある。途中途中で評価を書いている子がいたが、評価の時に解説文を書くという手立てもあったかもしれない。なりきりポイントを合わせて評価を行うということもできたかもしれない。子どもの能力を高めていくことにつながっていく。先生が話をしてもちょっとしか伝わらないが、子ども同士で話をするとたくさんのが伝わる。私も附属で実践をしていたが、子ども同士で評価した方が納得するし、批評評価ということにもつながっていく。その力をもたないといけない。そういう活動を仕組んでいくことが更なる教育を作っていくことにつながっていく。

田中先生より

これが、ゴールだと思ってたどり着いたらもっと先が見える。

書くことということは3つの機能。社会的機能どうやったら相手に伝わるか。達意ということ。個人的機能。自分の認識思考を助ける機能。文化的機能、生活作文や詩など。学校教育では、この3つともが必要。今回の素材は「のはらうた」。教材の特色から、どの機能に合わせて見ていくか。仮託の著者が登場して詩を自分を語るという形で構成されている。低学年での自分がしたことを語るということの延長線上にある。そこが特色。視点を変えて書くということ。視点を変えるという行為は「だれが」の部分を変える。音、におい、行動に感じるなどが見る視点に反映されている。個人的機能を育てる授業として位置づけられる。中心はそこにあるが、当然交流も社会的機能もある。ただし、3つを同時にやろうとすると授業が何をやっているかわからなくなる。この授業は個人的機能を刺激する授業であるととらえられる。そう考えると、低学年から高学年までの構想が授業者としてイメージできていく。

附属中学校では、多角的と重層的という考え方を持ち込んでいる。ここでいえば、のはらむらをかまきりや風の視点から見るといものが生み出される授業であった。かまきり自身が自分を俯瞰してみるという重層の視点が入ってくる。

3次は完成作品を読みあい、感想を交流するという場面になっていた。交流というところに発展の可能性を期待したい。全ての学習に交流が位置づけられている。交流を意見や考えの見せ合いだけにとどめていても意味はあるが、そこにとどまっているだけでは批判される材料になりかねない。何を交流するかというと個人の認識に関する発言や意見交流が作品に対してできるところまでいくと首尾一貫した授業になる。7時間では無理。ただ7時間で端緒のところまではいく。その後、交流を定期的に位置づけ、組み込んでいくと学習者自身の変化がとらえられるようになっていく。

なりきりということで仮定した作者になりきり、人物像をイメージする。そこで、個々で生まれてくるイメージはそのままでいいのかという問題がある。生活綴り方では、最初から中心的な課題になっていたのは概念崩し、観念的な物事の捉え方を崩して実感にあったとらえにしていくということをやっとしてきた。まだしている人はそれを大切に今もしている。そのことから考えると、人物像を考えて最初に出てきたものは既成観念にとらわれているものがほとんど。それが崩される必要がある。それを崩す仕掛けはしてある。見方を変えるというのがそこにあたる。概念崩しのしくみがされてある授業。授業者がどの程度意識していたかはわからないが、普通思っているよなところからもう一歩進んで概念を崩すところまで一歩先へ進むことができる。教材から必然的に出てきたなりきりともいえるが、発達段階にちょうどあった実践。「のはらうた」は中学校でも出てくる。決してこれだけで使えるという教材ではない。